
可哀想な魔王の話

ロード 14 / 14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可哀想な魔王の話

【Nコード】

N3372B

【作者名】

ロード14／14

【あらすじ】

魔王は復活した！！しかし魔王を倒す勇者達は正直強すぎる！！だからとりあえずどうしようかという魔王の裏話。ぶっちゃけ魔王は逃げる気満々だ！！

(前書き)

初めて短編でコメディー書いてみました

太古に勇者によって魔王は封印された。

しかし最近になって魔王は復活しました。

しかし当時の恐ろしい面影はどこにもなく、今は唯の普通の女の子みたいな感じになって復活してます。

「魔王様、勇者達が魔王城にたどり着きました。」

ここは魔王城。RPGでは最後にたどり着く場所。正直陰気くさい。

「えー！？もう来ちゃったの？めんどくさいー。で、何レベル？」

コタツの中で再放送のちび○るちゃんを見ている魔王。ちなみに魔王城があるのは極寒の地のような場所なので正直魔王様も寒いらしい。

「はっ！えーと勇者87、武道家87、賢者85、ブラックマジシヤン87ですね。」

「おーいネコー。かぁいいなあお前はー！！うりうりい！今日も寒いなあ？」

魔王はネコをもてあそび始める。肉球をぷにぷにとつついたりしている。

「話し聞けよ…。現実逃避をしないでください。」

「だってさー！！どんだけレベル上げてんの！！勇者達そんな暇人じゃないっしょ！？しかも何！？ブラックマジシャンって！！？」

いきなりあせりだす魔王。威厳のかけらも見つかんない。

「そんなこと言われても…。ていうか人費削減とか言って最初に一番弱いモンスター送るからですよ。魔王城にいるモンスター一体送るだけで倒せたのに…。」

「レベルが低いうちに倒しとくんだった…。ねえどうしよう？」

膝ががくがくしてる魔王。これはもう本気で駄目かもわからんね。

「では最初はその人間に近いお姿で油断させてみては…。」

「アホ！！本性現す前にそのまま殺される可能性のほうが高いわ！！あー！！名前が『ああああ』とか言うやつに殺されるのは嫌々！！」

誰だって嫌だよ。ていうかその名前にすると名前の神様が怒るはずなんだけど…。

「あ、報告です。勇者達が中ボス倒しました。どうします？」

「あーもう！！こうなりゃヤケよヤケ！！金で傭兵でも雇って！！」

お年玉無しでいいから!!」

「間に合いませんよ…。それでは勇者達に宝箱取らせてそこを写真に撮ってソレを警察に送っちゃえば?」

「それも駄目!!勇者だからとかいって釈放されるに決まってる! あゝもう、やっと封印が解けて自由になったのに、もう昔みたいに悪さしてないんだよ!!…なのに殺されるんだよ!?泣けるって…。」

魔王様、本気で困ってる。

「まあ倒されても仲間になりたそうな目で見ればなんとかなるんじゃないすか?」

「バカゝ!!私にだってプライドはあるもん!あゝもうあれだ。魔王の特権使う。1ターンに3回行動してやる!」

お、そこは魔王としてのプライドが勝つんだね。

「でも勇者は4人パーティですぜ?1ターン3回行動して倒せるんですか?」

「えゝ、なんで勇者は4人なの?私一人なのにゝ。じゃあタイマン張るよ。タイマン。んで勝ってやる!!」

「はあゝ。なるほど。しかしそれでも勝てるとは限りませんが…。」

「うるさい!!口答えすんな!喰らえイオナズン!!」

魔王はとうとう切れてご自慢のイオナズンを放つ。

しかし側近は呆れた感じにはあつとため息をつくと言文を唱える。

「マホカンタ。」

バキーン！

自分の放った技が自分に帰ってくる。

ズゴムシャー！！

わけのわからない効果音がし、魔王に呪文が直撃する。

「うっうっ……あんた絶対殺す……。ヒック…ヒック。」

コタツも吹っ飛びみかんが散乱し、魔王は泣きじゃくる。

これほど決戦にふさわしくない場面はあるのだろうか？

「あゝもう泣かないでください魔王様……。ほら、鼻かんで……」

側近も呆れた様子でティッシュを取り出し魔王の鼻にあてる。

「エグ…ヒック……自分でやる……。」

魔王はヘタリと座り込み鼻をかんで落ち着いた。

「……うん……。悪かった……。だからほんとにどうしようか？そろそろほんとにヤバイ気がする……。」

「ん……もういつそのこと隠しダンジョン開いて隠しボスをラス

ボスってことで。」

側近のいきなりの発言!!

「え!?! いいのかソレ!?! でいくたーさんに怒られちゃうよ!?!? でもまあナイスアイデアだね。ていうか隠しダンジョンって入り口どこよ?」

「ここです。」

そういつて部下はコタツをどかす。
するとアゝラ不思議。階段があるじゃない。

「ええ!?! これ階段だったの!?! 私ほりごたつかと思ってた。つーことはさ、勇者達にこの部屋を通れと?」

「ええ。そうですよ?」

いくら魔王といっても今は悪さをしない、普通の女の子のようなもの。自分の自室を赤裸々にするのは耐えがたい屈辱であろう。

「……やっぱダメ…。この部屋に通すのは私が死んだ後にしといて……。」

やむなくこの提案は却下される。

「よし!! それなら世界の半分あげるってことで手打ってみる。」

魔王はいきなり大きく出た!!

「ダメですよ。魔王様の土地じゃあないんですから。」

現実的な話を出されこれも却下される。

「じゃあもうこれでいく。『勇者が!!泣いて許してくれるまで!私に謝るのをやめなさい!!』」

「プライド持てよ…。」

「な…!!?タメロイ!?!」

もう魔王の地位もプライドも地に落ちたと見える。
魔王が倒されるのは時間の問題だ。

「勇者達はさ、私の姿見たことないんだよね?」

「ええ、多分。」

魔王はコタツを元に戻しながら側近に聞く。

「じゃあさ、適当にソレっぽいやつ魔王にしてさ、影武者立ててやり過ぎしちゃおっか。」

魔王はコタツに首元まで入り両手でがっちりコタツの足を掴む。
ここですでに魔王はコタツから出まいと籠城戦を決行している。

「まあそれでいいなら……。では適当に仕立てておきます。」

「お願いねー!!」

側近は魔王の部屋を後にし、部下を集めに行く。

「つつゝわけで、こん中から魔王様の影武者を選出する!!」

みんなを集め『第一回魔王になってみよう!』企画を開催する魔王の側近。

しかしブーイングの嵐。

「ふざけんなー!!おまつ!!それ魔王自分で戦えよ!!」

「俺死にたくないよー!!もう俺勇者側に寝返るぞ!!」

当然と言えば当然か。

「そもそもお前!!あんな魔王で正直いけると思ってんのか!!情けないと思わんのかあ!!」

部下の一人が魔王の側近に指摘する。

「……ぶっちゃえ無理ダト思ッテマス……。はい。」

腹心の部下にすら呆れられている魔王。

そもそも昔は強大な魔王だったのに今となってはただの女の子。みな疑心暗鬼になる。

「そもそもあれモノホンの魔王かあ！？封印されてる間に『ドクタ―レオン』に『時空を捕らえました。』とかいってすり替えられたんとちゃうんかあー！！」

「その後『コンプリート！』とかやってるぜ！！ぜってええ！！」

とうとう魔王偽者説まで流れ始める。

ああ…、もうあかんわこの組織。

部下の皆さん、各々の思惑が交錯してますね。

「まあまあ皆さん落ち着いて…！じゃああれだ、くじ引きでいこう。」

皆を落ち着かせるために公平にくじ引きを提案する魔王の側近。なにやら最初から決まっていたかのようにクジ箱を取り出す。

「じゃあまず私から…。」

そういつて発案者の魔王の側近からくじを引く。

「なっ…！！？」

いきなり『当たり（笑）』と書かれたまるでガリガリ君の当たり棒のような当たりを引く魔王の側近。

広場に広がる静寂。

魔王の側近はソレを箱に戻す。

「ッていう感じにやるよ！！今の練習！！」

強引なやり直しに一同暴動を起こす。

「ふざけんなテメェ！！お前で当たりじゃろうがあ！！」

「潔く死んでこいやあ！！」

「お前が死んでも別に支障はないんだよ！！」

など魔王の側近より地位は低いはずなのに言いたい放題言う部下共。
さすがの魔王の側近もキレる。

「うるせえええ！！お前等、アレだよ！！特別な中ボスは1ターン
2回行動じゃヴォケ共！！悔しかったら中ボスになってみる雑魚共
！！ていうか俺を倒してみろー！！」

「上等だー！！みんな、こいつ囲んじまえ！！一度に4人でかかるぞー！！」

「下克上じゃー！！」

いっせいに反乱を起こす部下共。

「うらあー!! 来いやあー!! 皆殺しじゃあー!!」

本性を現す魔王の側近。

勇者が来る前にもう仲間割れが起きている。

その頃当の本人の魔王はというと。

「うりいー。ネコー!! お前かわいすぎるぞー!! うりやうりや!」

部下共が暴徒と化しているとは露知らず、自室でネコと戯れていた。

ちなみにその頃勇者一行はダメージを受ける床で人知れずひっそりと息絶えていた。

(後書き)

もう勢いで書いたものです^^;

楽しんでいただけたら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372b/>

可哀想な魔王の話

2010年10月21日23時22分発行